

令和 5 年 4 月 28 日現在

機関番号：32820

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K02653

研究課題名(和文) 我が国におけるインクルーシブ保育の定義と実践モデルの開発

研究課題名(英文) The Definition of Inclusive Child Daycare in Japan and the Development of Practice Models

研究代表者

守 巧 (MORI, TAKUMI)

こども教育宝仙大学・こども教育学部・教授

研究者番号：90609843

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、合理的配慮に対する幼稚園教諭の意識から具体的な保育実践に至るまでの実態調査を実施した。さらに、インクルーシブ保育の実情、とりわけ困難性を明らかにするとともに、ニュージーランドにおけるインクルーシブ保育の実地調査を行うことで我が国のインクルーシブ保育を考察した。インクルーシブ保育は経験年数によりイメージや困難さに差異があることやインクルーシブ保育実現には、園の文化を大切にしつつ、保育の在り方を適宜変更する柔軟さが求められることを明らかにした。あわせて日本、ニュージーランドともに、教科型学習期におけるインクルーシブ教育・保育の実現には課題があることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の学術的意義は、インクルーシブ保育にかかる研究が僅少で、かつインクルーシブ保育の実態が曖昧だった現状に対し、幼稚園教諭を対象とした質問紙調査及びインタビュー調査により、幼稚園教諭の意識から保育実践内容まで、実態に迫ったところにある。くわえて、インクルーシブ保育の困難性を明らかにしたことで、インクルーシブ保育を巡る研究の基礎的データになる。
社会的意義は、保育現場における合理的配慮の検討材料になるとともに、合理的配慮が浸透しつつある日本で教育・保育現場のエビデンスを提供したことは意義深い。グローバル化が進む中で保育実践レベルでの合理的配慮の検討は時代の要請にかなったものである。

研究成果の概要(英文)：This study conducted a survey of kindergarten teachers' awareness of rational considerations, from their awareness of rational considerations to specific childcare practices. In addition, we clarified the actual situation of inclusive childcare, especially the difficulties involved, and examined inclusive childcare in Japan by conducting a field survey of inclusive childcare in New Zealand. We found that the image and difficulties of inclusive childcare differ depending on the number of years of experience, and that the realization of inclusive childcare requires the flexibility to change the way childcare is provided as needed while respecting the culture of the preschool. In addition, both Japan and New Zealand have challenges in realizing inclusive education and childcare during the academic learning period.

研究分野：幼児教育学・保育学・特別支援教育

キーワード：インクルーシブ保育 合理的配慮 ニュージーランド 幼稚園 幼稚園教諭

1. 本研究の背景

今日の我が国における障害児保育は、「健常児・障害児」と明確にわけた分離保育からインテグレーション（統合）を経てインクルージョン（包括）を強く志向する流れになってきている。しかし、インクルーシブ保育の課題は、フルインクルージョン（障害児が1日のすべてを通常学級で過ごすこと）という「形態」を維持することが目的となり、保育における双方の豊かな学びへの視点が欠落している点である。現実的には幼稚園教諭が悩みながら保育をしていると考えられ、インクルーシブ保育の理念のみが先行する形となり、インクルーシブ保育の具現化にまで至っていない。本来、インクルーシブ保育には障害児への保育ニーズに合わせて、機能的にカリキュラムや活動の流れを検討する必要がある。教諭は、活動において両者（健常児・障害児）の思いを受け止めながら取り組まなければならないが、現実的には能力の差を埋めるために障害児の取り組む内容の水準を下げた個別指導を行うか、逆に障害児にあわせて全体を再構成するかの二者択一に陥ることが多いと思われる。先行研究よりインクルーシブ保育は、「定義も未整理（鬼頭，2017）」、「理念が先行しているため、保育者が保育の在り方や方向性を省察・検討することが難しい（広瀬・太田，2014）」といった意見もある。このように、インクルーシブ保育は、制度や理念が整えられているものの、園では具体的な保育方法や内容についての検証が必要なことが多い状況にあることが推察される。

2. 目的

インクルーシブ保育モデルの実態調査

我が国の保育現場の実情に沿ったインクルーシブ保育の定義や実践モデルを開発・提供することを目的とする。そのため本研究においては、合理的配慮に対する幼稚園教諭の意識から具体的な保育実践に至るまでの過程を明らかにすることで幼稚園における合理的配慮の実態について検討する。

教諭のインクルーシブ保育に対する認識の解明

インクルーシブ保育の実践について教諭の認識を解明する。1つ目は、インクルーシブ保育の実情、とりわけ困難性を明らかにする。2つ目は、世界においてインクルーシブ教育をリードしているニュージーランドにおける実地調査を行い、インクルーシブ保育に関する教諭の認識の差異を検討する。

3. 方法

インタビュー調査

(1) 調査方法：幼稚園教諭に対する半構造化面接法によるフォーカス・グループ・インタビューを実施した。

(2) 研究協力者：

区分	合計	男女比率	経験年数	経験平均年数	SD
新任教諭	7名	1:6	1年～2年	1.71年	0.48
中堅教諭	6名	3:3	4年～14年	9.14年	3.89

熟練教諭	6名	3:3	18年～28年	22.16年	3.65
------	----	-----	---------	--------	------

(3)面接時間：それぞれ60分程度であった。

(4)分析方法：インタビュー実施後、逐語録化した。逐語録化したデータをSCAT (Step for Coding and Theorization) により、新任教諭、中堅教諭、熟練教諭をそれぞれ分析した。

質問紙調査

(1)方法

郵送留め置き法による質問紙調査を東京都23区の公立・私立幼稚園に対して実施した。調査時に同意した調査対象者のみが、質問紙に回答した。

(2)調査内容

フェイスシートでは、回答者の属性を尋ねた。「インクルーシブ保育」に関する質問項目では、「はい」から「全くない」までの4件法で尋ねた。さらに、「はい」「よくある・ある」と回答した場合は、それぞれ自由記述による回答を求めた。自由記述は、経験年数ごとにKH Corder で分析をした。

4. 結果・考察

インタビュー調査

(1)新任教諭のインクルーシブ保育の現状

新任教諭は、多様性のある子どもの実態把握まで至らないことから個別的な支援よりも集団活動の形態や他児への影響等に困難さを感じている。このことが保育の在り方そのものへの疑念を抱くことにつながっていることがわかる。あわせて、加配置による対応を望むが、園内体制を変えるほどの提案までには至っていない。

(2)中堅教諭のインクルーシブ保育の現状

中堅教諭は、多様性のある子どもと他児との関係性を強化したいと願っている。その過程において、それぞれの特性から思うように構築できない現状に困惑しており、また内省を深めている。連携の必要性を感じているものの園内体制(加配も含む)の整備ができていない現状がある。

(3)熟練教諭のインクルーシブ保育の現状

熟練教諭は、それぞれの子どもの理解し、他児との関係構築を目指す現状があった。また、インクルーシブ保育には保護者や他教員といった人的資源の有効活用を意識し、それへの課題を感じている。さらに曖昧さがあるインクルーシブ保育の概念の理解への困惑を抱いている。

幼稚園教諭が抱えているインクルーシブ保育の困難性を明らかにした。経験年数問わず、加配教諭を含む園内の支援体制への課題があった。一方で、地域や園によって加配置の判断や財政状況が異なる。特に、財政面は園に与える影響が大きく、教諭への心理的安定を左右する要因になる。そのため、困難の程度や時期は、地域や園によって違いがあり、一様に論じることに限界があると思われる。

質問紙調査

243園から回答を得られた(回収率35%)。女性は90%(219名)、男性は10%(24名)

であった。年齢は、18～24歳が11名(4%)、25～34歳が66名(27%)、35～44歳が45名(19%)、45～54歳が61名(25%)、55歳以上が60名(25%)であった。

(1)活動内容を変更しないが、場所を変更して保育をする、と答えた教諭は44%と約半数を占めた。一方、活動内容や課題、教材は変更するが、同じ場所で保育をする、と答えた教諭は69%であった。これらは活動や課題に応じて対象児の支援や状態に応じて柔軟に適宜変更している実践が背景にあると思われる。

(2)経験年数10～14年は視覚的な支援をはじめとする特別支援教育にかかる具体的支援を支援の核としていくと共に、インクルーシブ保育のイメージが困難さを伴うイメージであったことから教諭のキャリアにおいて10～14年はこれまでの様々な子どもと出会い、より具体的な支援の在り方を模索していくプロセスを経ている。この時期は、一つの過渡期になっていると思われる。この意味ではインクルーシブ保育を実践する教諭は経験年数15年までは試行錯誤が続き、15年以上になると見通しをもって人的資源を活用しながらインクルーシブ保育を実践できると思われる。

5. ニュージーランド視察

コロナ禍のため延期をしていたニュージーランド視察を2022年度に実施した。様々なバックグラウンドを持つ子どもや保育者がともに生活をしている現状があり、多様性を前提としたカリキュラムを実施していた。具体的には、どの子どもでも遊びやすい環境構成であったり、認める言葉かけをしつつ子どもの遊びを邪魔しないかわりをしたり、物的・人的環境が整っている現状があった。一方、就学後の教科型学習の場合、両国共に一斉での授業を展開することに困難さがあることがわかった。

文化的背景も含めたインクルーシブ教育への考え方や実態を把握することで、日本におけるインクルーシブ保育の実態を比較検討することができた。

6. まとめ

研究期間全体を通しての成果として、我が国におけるインクルーシブ保育について、以下のような実態が明らかになった。インクルーシブ保育は経験年数によりイメージや困難さに差異があるため、困難さに応じた研修等が必要であること インクルーシブ保育実現には、園の文化を大切にしつつ、保育の在り方を適宜変更する柔軟さが求められること 我が国、ニュージーランドともに、教科型学習期におけるインクルーシブ教育・保育の実現には課題があること、である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 守巧・若月芳浩	4. 巻 12
2. 論文標題 保育経験年数別にみるインクルーシブ保育への捉え フォーカスグループインタビューの調査からー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 こども教育宝仙大学紀要12号	6. 最初と最後の頁 29-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 守巧・足立祐子・若月芳浩・広瀬由紀・久保山茂樹
2. 発表標題 共生社会の形成に向けた保育・教育の希求（5）ーインクルーシブな保育実践の充実と保育の質向上との関係を考えるー
3. 学会等名 日本特殊教育学会第60回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 守巧・長谷川幸男・石田隆博
2. 発表標題 幼稚園等における特別な配慮が必要な子どもの保護者・特別な配慮が必要な保護者を考える」
3. 学会等名 日本LD学会第31回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 守巧・若月芳浩
2. 発表標題 幼稚園におけるインクルーシブ保育に関する基礎的調査
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第32回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 守巧・若月芳浩
2. 発表標題 幼稚園教諭が認識するインクルーシブ保育－フォーカスグループインタビューから－
3. 学会等名 日本保育学会第74回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 守巧・広瀬由紀・鶴巻直子・鈴木由歌・若月芳浩・久保山茂樹
2. 発表標題 共生社会の形成に向けた保育・教育の希求（4） 「つながり」の中でその子らしく過ごす姿やそれを可能にする実践から学ぶ
3. 学会等名 日本特殊教育学会 第59回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 守巧・若月芳浩・松原豊
2. 発表標題 インクルーシブ保育を考える
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第31回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 守巧・長谷川幸男・若月 芳浩・広瀬 由紀・久保山茂樹
2. 発表標題 共生社会の形成に向けた保育・教育の希求（3） インクルーシブ保育を再検討する
3. 学会等名 日本特殊教育学会 第58回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 守巧・松原豊・若月芳浩
2. 発表標題 公立幼稚園におけるインクルーシブ保育の実態調査－質問紙調査を中心に－
3. 学会等名 日本LD学会第29回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 守巧・若月芳浩
2. 発表標題 保育経験年数別にみるインクルーシブ保育への捉え－フォーカスグループインタビューの調査から－
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第30回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 守巧・柄田毅・田中謙・川勝義彦
2. 発表標題 インクルーシブ教育の実現に向けた特別支援教育に関する課題 「障害のある児童と障害のない児童が共にいる意義について～保育現場から」
3. 学会等名 日本教育福祉学会第10回研究大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構、小田豊・秋田喜代美、加藤篤彦 執筆者守巧	4. 発行年 2022年
2. 出版社 中央法規出版	5. 総ページ数 186
3. 書名 幼稚園・認定こども園キャリアアップ研修テキスト 特別支援教育	

1. 著者名 齊藤勇紀、守巧、山田謙一	4. 発行年 2022年
2. 出版社 萌文書林	5. 総ページ数 268
3. 書名 子どもが共に育つための障害児保育	

1. 著者名 編著者那須信樹 執筆者守巧	4. 発行年 2023年
2. 出版社 株式会社 みらい	5. 総ページ数 167
3. 書名 保育者のためのキャリア形成マネジメントブック	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田丸 豊 (松原豊) (Tamaru Yutaka) (10566805)	筑波大学・体育系・教授 (12102)	
研究分担者	若月 芳浩 (Wakatsuki Yoshihiro) (30349203)	玉川大学・教育学部・教授 (32639)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------